

達磨^{だるま}さまといいますと、縁起物としての姿、また、お寺などの掛け軸に描かれているぎょろりとした眼の姿、微動だにしない坐禅の姿など、様々な姿が思い浮かぶことと思います。

十月五日は、達磨さまのご命日です。この日、禅^{ぜん}寺では、達磨さまのご遺徳^{しの}を偲^{しの}び達磨忌^{だるまき}という法要が営まれます。

達磨さまは、インドに生まれ、般若^{はんにや}多羅^{たら}尊者^{そんじゃ}のお弟子さんとして出家をされ、インドを巡り、中国に渡って、禅の教えを広められました。

達磨さまは六世紀の初めごろ、中国の梁^{りょう}という国で、仏教に深い信仰を持つ武帝^{ぶてい}という皇帝に対面されたといわれます。インドからやってきた高名な僧である達磨さまに、武帝は多くのお寺を建立し、沢山の僧侶を育成した功績を認めてもらおうと話を進めました。それに対し達磨さまは「無^{むくどく}功德」(功德はない)と応え、さらに武帝が「私と面と向かっているものは、誰か」と問えば、「不^{ふしき}識」(知らない)と素^そっ気なく返されてしまったそうです。武帝から見れば、自分が仏教の発展に尽くしたという功績を称えてもらえなかったのですから、さぞかし戸惑ったことと思います。

一方で、達磨さまは、どのような気持ちを込めて武帝に会われたのでしょうか？

初めてお会いする方に、自分が何者であるかを伝えるために、私たちは、さまざまな説明を重ねます。例えば、名前、年齢、趣味、仕事、自分のなした功績や努力してきたことも用います。皆、「私は・・・」で始まる、自分の属性を使った文章で伝えようとしています。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

しかしながら、自分を相手に知ってもらうために、どんなに細かく、より詳しく文章を積み重ねていっても、それを以て「自分自身が何ものであるか」を伝えられているかという、そうでもありません。

達磨さまが中国に渡って広められた禅は、人からの評価をあまり助けとせず、自らをより所として、自分自身と真摯に向き合い、自らを ^{ととの} 調べていくものです。

達磨さまの姿を思い起こし、お手本として生きてゆきたいものです。

— 終 —